

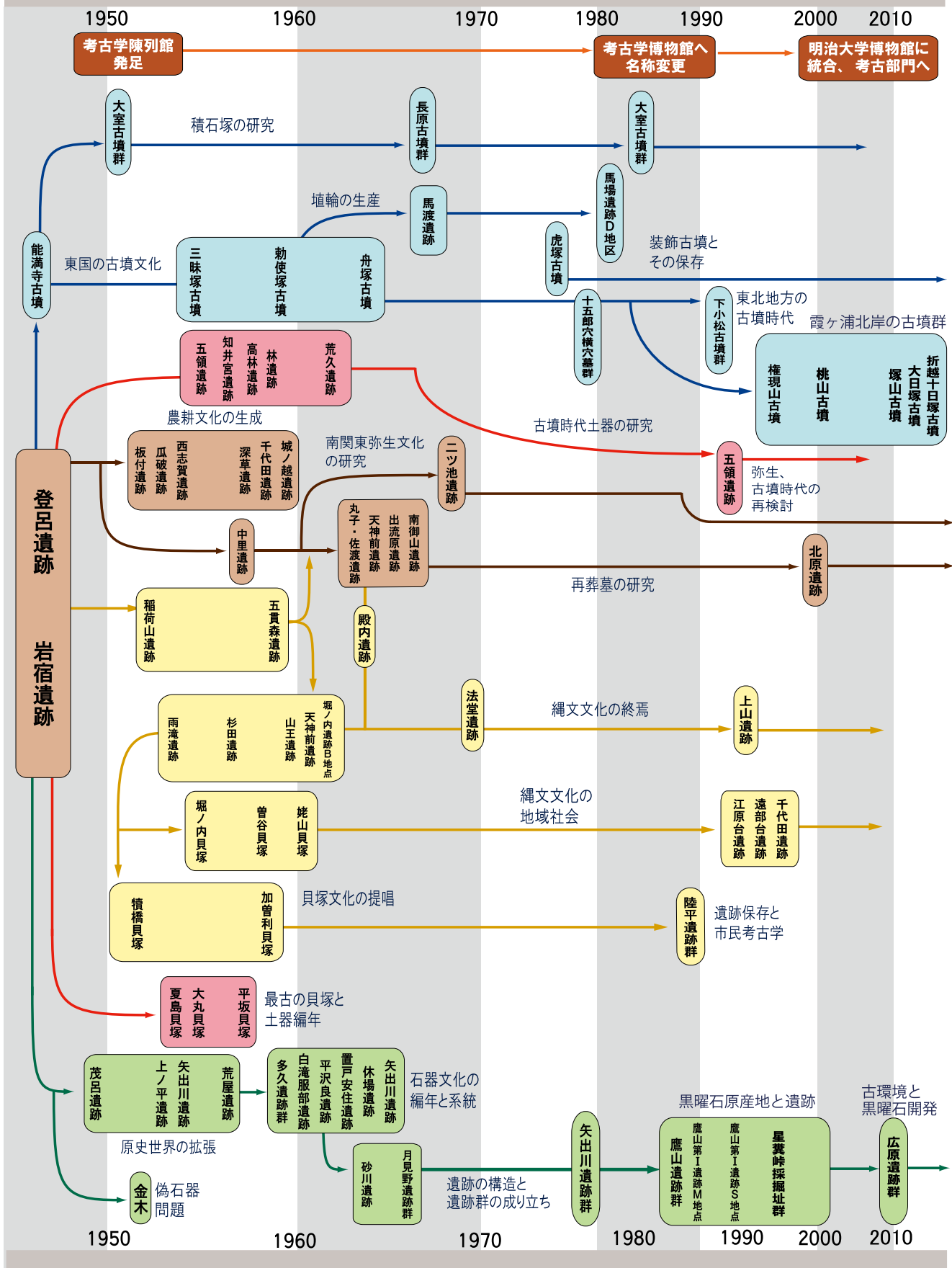
明大考古学の
過去・現在・未来
—モノ学のその先へ・・・—



2018

明治大学文学部考古学専攻 明治大学博物館

明大考古学のあゆみ



表紙写真：群馬県岩宿遺跡出土ホルンフェルス製打製石斧（岩宿I石器文化，後期旧石器時代前半期，重要文化財）

はじめに

1950年の文学部考古学専攻（考古学研究室）および1952年の考古学陳列館の創立をもってはじまる明大学の考古学は、戦後の重要遺跡の発掘にはじまり、現在までに約70年間におよぶ考古学の教育と研究の道のりを歩んでまいりました。

今回、考古学研究室と博物館が企画した展覧会「明大考古学の過去・現在・未来—モノ学のその先へ……—」では、発掘を中心としたおおむね前世紀までの研究の歩みをダイジェストで紹介し、今世紀以降、学際的あるいは国際的にも多様に展開している現在の明大考古学の活動を紹介します。本冊子には同展覧会の内容を収録しています。

明治大学を会場として開催する一般社団法人日本考古学協会第84回総会（5月26日・27日）に合わせて開催・刊行する展覧会と本冊子をとおして、同協会員はもとより、広く市民の方々にこれまでの明大考古学の歩みと現在の魅力を発信できたと思えば、主催者としてたいへん幸いに思います。

最後に、展覧会および本冊子の制作にあたっては、明治大学の考古学を彩る特色ある研究施設・組織である黒耀石研究センター、日本古代学研究所、資源利用史研究クラスター、天然資源研究所そのほかの関係各位から多大なご協力、ご支援を賜りましたことに感謝を申し上げます。

明治大学文学部教授 石川日出志
（日本考古学協会第84回実行委員会委員長）

例言

- ・本冊子は、2018年度企画展「明大考古学の過去・現在・未来—モノ学のその先へ……—」の展示内容を収録しているが、同企画展の内容のうち一部は本冊子に含まれていない。
- ・2018年度企画展「明大考古学の過去・現在・未来—モノ学のその先へ……—」
主 催：日本考古学協会第84回総会実行委員会
企 画：明治大学考古学研究室・明治大学博物館
協 力：明治大学黒耀石研究センター・明治大学古代学研究所・明治大学資源利用史研究クラスター・
明治大学天然資源研究所
会 期：2018年5月21日～6月21日
会 場：明治大学博物館特別展示室
- ・展示の制作は島田和高（博物館学芸員）が統括し、日本考古学協会第84回総会実行委員会が行った。
実行委員：阿部芳郎・石川日出志（委員長）・忽那敬三・駒見和夫・佐々木憲一・島田和高・藤山龍造・矢島國雄・
若狭 徹（五十音順）
- ・本冊子の執筆は上記実行委員と協力機関スタッフが分担して行い、編集作業・制作は島田が行った。

明大考古学小史 1： 旧石器時代の調査と研究

明治大学の考古学研究室は戦後まもなく群馬県岩宿遺跡の発掘調査を実施し、これを契機に旧石器時代の研究を推進してゆくことになった。その過程では、関東平野や中部高地などで相次いで発掘調査を実施し、研究の基礎である時間軸の構築を押し進めていった。これらの調査に基づいて、ナイフ形石器、尖頭器、細石刃を中心とした石器群の推移が描き出されてゆく。こうして今日に至る研究の枠組みが次第に整備されてゆくことになった。

一方、高度経済成長期に至ると、都市部の開発が否応なく進み、これと並行して発掘調査や遺物分析は大きな転換を迎える。埼玉県砂川遺跡や神奈川県月見野遺跡群の発掘調査はその代表格である。そこでは石器製作で生じる剥片・碎片を含めた緻密な分析が展開された。これによって特定の遺跡における石器製作はもとより、複数の遺跡にわたる移動生活の姿が具体的に示されるなど、旧石器時代の生活を読み解くための方法が構築されてゆく。

1980年代を迎えると、調査はさらなる展開を見せる。長野県矢出川遺跡群では自然科学を含めた学際的調査を展開し、遺跡遺物と古環境の関係に踏み込んでゆく。また、長野県・鷹山遺跡群では黒曜石原産地の探求を進めるなど、石器石材の獲得から供給に至る流れに取り組んだ。これらの問題意識は今日まで継承されているが、あわせてキャンパスの整備にともなう発掘調査を展開するなど、足元に眠る遺跡にも積極的に取り組んでいる。



岩宿遺跡 A 地点の調査（群馬県みどり市）
発掘調査による日本列島旧石器時代の発見。



砂川遺跡 A 地点の調査（埼玉県所沢市）
旧石器狩猟採集民のムラと遊動生活の研究のはじまり。



月見野第 II 遺跡の調査（神奈川県大和市）
遺跡群の発掘による南関東ローム層編年の構築。



月見野第 IIIA 遺跡の遺物出土状況（神奈川県大和市）

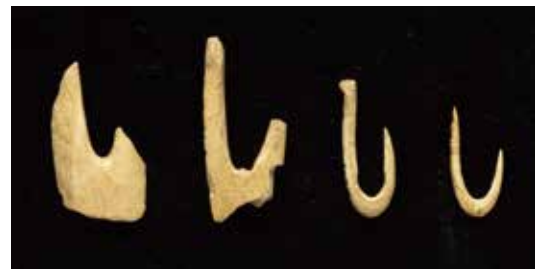
明大考古学小史 2： 縄文時代の調査と研究

縄文時代研究は戦後間もなく、最古の貝塚として注目された神奈川県横須賀市夏島貝塚の発掘から始まる。縄文時代初頭の文化の解明は、併行して行われていた群馬県岩宿遺跡における最古の人類文化の解明にも密接に結びついていた。同じメンバーによって最古を求める2つの研究が併行して続けられたのである。また夏島貝塚の発掘は夏島式土器をはじめとする早期前半の土器型式編年にも役立てられた。

1960年代は晩期の土器編年を探求する調査が計画され、関東地方や東北地方の晩期の遺跡が多数調査された。この頃、明治・早稲田・慶應の3大学での研究会が開催され、活発な土器編年研究が展開され今日に続く編年が確立した。こうした研究動向は1970年代の高度経済成長期に至り、大規模開発とともに進められる集落や貝塚の発掘と研究へと移り変わる。そしてこれらの研究の蓄積はやがて、縄文文化の地域性を探求する研究として結実し、「貝塚文化」や「井戸尻文化」といった地域の特性を指標とした地域文化の実態が提示された。

1990年代に入ると、縄文の地域社会の実態をより詳細な手法で検討する遺跡群研究が始まる。千葉県印旛沼沿岸や東京湾沿岸の貝塚や集落遺跡を対象とした学術調査が進められ、資源利用をキーワードとした学際的な研究が展開するフィールドとして利用されるようになった。

これらの研究は現在も継続しており、関連理化学の分析手法を取り込んだ研究組織（日本先史文化研究所・資源利用史研究クラスター）の設立にもつながっている。さらにこれまでの調査によって蓄積された膨大な出土品を再検討する研究とも結びつき、多様な研究が展開している。



夏島貝塚の調査（神奈川県横須賀市）

最古級の貝塚の調査により早期初頭の土器・石器などとともに豊富な骨角器や動物遺体が発見され、生業活動の実態が明らかにされた。また放射性炭素年代測定により縄文時代早期の年代観が初めて示された。



曲輪ノ内貝塚の調査（千葉県佐倉市）

「環状盛土遺構」と呼ばれた遺跡の高まりの内部に複数の居住痕跡が累積していることを確認し、後・晩期の集落遺跡であることを証明した。また、遺跡の継続性が極めて長期にわたる事実や、出土人骨の食性分析などから多様な資源利用の実態が明らかにされつつある。後・晩期における長期継続型の社会の存在を示す遺跡として現在でも学際的な研究が進められている。

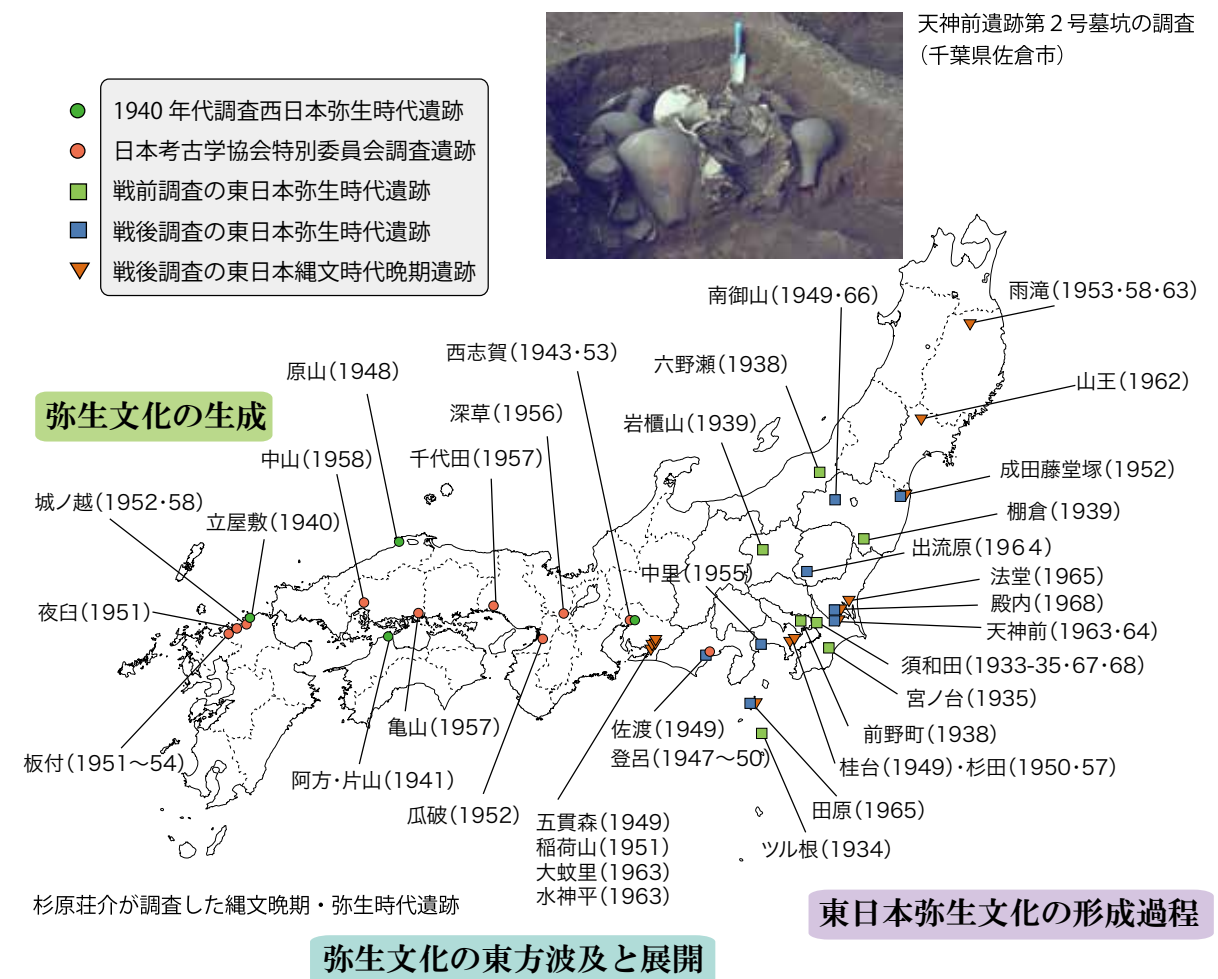
明大考古学小史 3： 弥生時代の調査と研究

考古学専攻の創設と弥生時代研究 1950年度に明治大学に考古学専攻が創設された。1947年から始まった静岡県登呂遺跡の弥生時代集落の日本考古学協会特別委員会による共同調査の成果や1949年に群馬県岩宿遺跡で縄文時代以前の人類文化の存在を立証したことが学内で評価されて実現した。

杉原荘介が主導した研究 4か年の登呂遺跡調査が終了した1951年から日本考古学協会内に弥生式土器文化総合研究特別委員会（委員長杉原）が設置され、西日本各地の弥生前・中期の遺跡が共同調査された。じつは、杉原が戦前から構想した弥生文化の成立と波及の探求が目的であった。

再葬墓遺跡の探求 杉原は、学会による共同調査ののち、東日本各地の弥生時代前半期の遺跡を調査し、東日本弥生文化の問題を探索した。関東・東北一帯の調査遺跡の多くは、1963・64年の千葉県天神前遺跡の調査成果から再葬墓と命名された特異な遺跡であった。これらの調査により、再葬墓は東日本弥生文化を特徴づける墓制と認識される。

現在の東日本弥生文化研究 1983年に杉原が没してから、弥生時代遺跡の組織的調査は行われていない。考古学界全体と同様に、テーマ設定型の研究に移行した。近年では、弥生時代再葬墓の造営プロセスの解明、関東・東北・北海道の弥生時代併行期土器の広域編年などが研究テーマとなっている。



明大考古学小史 4： 古墳時代の調査と研究

後藤守一の調査 明治大学の古墳時代研究は、専攻開設時の教員である後藤守一に始まる。後藤は当時の古墳研究の牽引者であり、幅広い学識に拠った考証学的研究を特徴とした。千葉県能満寺古墳（1947年）をはじめ、郷里である静岡県の賤機山古墳・三池平古墳（1958年）など著名古墳の調査を手掛けた。

杉原荘介の調査 杉原は、土師器の編年研究に関連して埼玉県五領遺跡の調査を行った（1957年～）。畿内・東海・山陰系土器を多く出土する集落跡であり、関東古墳前期の土器研究に強い影響を及ぼした。

大塚初重・小林三郎の調査 後藤の次代を担った二人は茨城県をフィールドとし、前方後方墳の勅使塚古墳の調査（1961年）、埴輪生産システム解明を目指した馬渡埴輪窯の調査（1965年～）などを行った。その後、長野県大室古墳群（1984年～）を長く手掛け、積石塚を指標とする渡来文化を追求した。小林は晩年霞ヶ浦沿岸の古墳測量を実践し、その仕事は後任の佐々木憲一に引き継がれた。

古墳保存への努力 奈良県高松塚古墳壁画の発見と同じ頃、明治大学では茨城県虎塚古墳で石室装飾を確認した（1973年）。その後、環境保全にも尽力し、良好な状態を今に伝えている。明治大学が関わった古墳時代遺跡では、虎塚古墳、馬渡遺跡、大室古墳群などが国史跡に、三味塚古墳出土品が国指定重要文化財に指定されている。



虎塚古墳の調査（茨城県ひたちなか市）
未盗掘の横穴式石室が発見され、白土を塗った室内にはベンガラで武器・武具や円文・渦文・三角文などが鮮やかに描かれていた。



五領遺跡A地区の調査（埼玉県東松山市）
古墳前期の集落跡の調査。出土土器は、「五領式」として関東最古の土師器に位置付けられた。



大室古墳群 165号墳の墳丘全景（長野県長野市）
積石塚で、中央に合掌型石室がみえる
写真：長野市教育委員会所蔵



馬渡埴輪窯跡群の調査（茨城県ひたちなか市）
微高地の斜面に埴輪窯群や粘土採掘穴が、微高地上に工房跡（竪穴建物）が検出され、埴輪生産システムが解明された。

明大考古学の現在

明大考古学の発足 明治大学では、1950年4月に正式に文学部考古学専攻が発足したが、すでに静岡市登呂遺跡の共同調査（1947年～）や群馬県岩宿遺跡の発掘調査（1949年）を行い、のちの学史に足跡を残す実績をあげていた。専攻発足時は後藤守一教授と杉原荘介助教授の2名体制で、後藤がおもに古墳、杉原が旧石器・縄文時代の遺跡の調査研究を牽引した。1952年には、杉原が戦前から収集してきた資料を中心に考古学陳列館が創設され、考古学博物館（1985年～）を経て、2004年に刑事・商品博物館と統合されて明治大学博物館考古部門へと展開してきた。

明大考古学の現在と特色 現在（2018年度）の明治大学考古学研究スタッフは、文学部考古学専攻専任教員5名、博物館考古部門学芸員2名、黒耀石研究センター特任教員2名を核として、学芸員養成課程専任教員2名、各研究プロジェクトの共同研究者20数名から構成される。さらに、いくつもの科学研究費助成事業（科研費）による学内外の共同研究で、卒業生を含む多くの研究者と活動をともにしている。

明治大学では、＜大学における高等教育の源は研究にあり＞と謳い、大学をあげて研究を推進するために＜研究・知財戦略機構＞を組織しており、考古学分野では、黒耀石研究センター、資源利用史研究クラスター、国際日本古代学研究クラスターの3プロジェクトが実働している。遺跡の調査研究はもちろんであるが、研究課題を前面に出し、かつ様々な研究手法をとる研究者の相互が協同して学際的かつ多角的に人類史を再構成する研究活動を繰り返している。また、アジアや欧米の組織・研究者との国際連携も推進されている。

いずれもが、これからの研究を切り開く試みである。しかしながら、もっとも重要なのは、これらの活動を通して研究する喜びをより多くの方々と共有することである。

基準資料を読み解く 明治大学の考古学は、過去70年にわたって発掘調査を積み重ね、戦後の考古学を先導してきた。現在、こうして蓄積された資料を新たな観点から読み直し、将来的な活用を模索する試みが進められている。今日の考古学の成果は、長い時間をかけた積み重ねの結果に他ならない。その過程では研究の鍵となる調査が幾つも繰り返され、それを道標に新しい研究が推し進められてきた。今日の考古学の土台という意味で、それらを基準資料と呼んでもよい。一方、考古学研究者の問題意識は日々刻々と変化を続けており、必然的に資料を眺める眼差しも変わり続けている。新たに考古資料を蓄積する動きと並行して、これまでに得られた基準資料を新鮮な視点や方法のもとに読み直してゆく試みもまた欠かせない。

現在、それぞれの時代を対象に見直しが進められているが、矢出川遺跡（旧石器時代）、白滝服部台遺跡（旧石器時代）、法堂遺跡（縄文時代）、舟塚古墳（古墳時代）、三昧塚古墳（古墳時代）について日本考古学協会第84回総会でのセッション「教育資源、研究資源、文化資源としての基準資料」（2018年5月27日）で成果の一部を公開している。これら基準資料の精査を進めてみると、これまでは見えにくかった新たな事実が少しずつ浮かび上がってくることになる。



新たに復元された茨城県舟塚古墳出土の短冊形水平板付き馬形埴輪

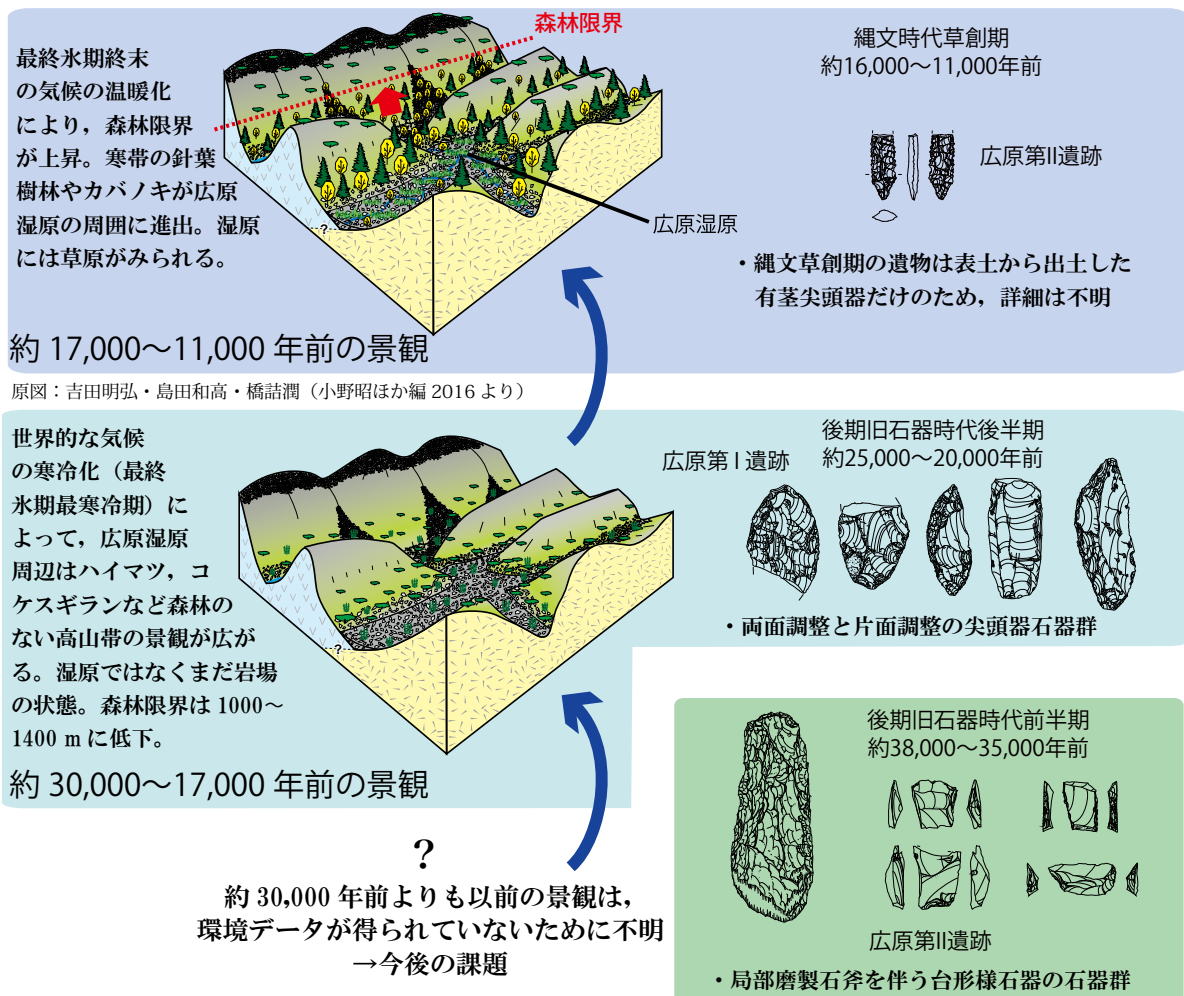
On-going research 1：古環境変動と黒曜石資源開発 明治大学黒曜石研究センター

設置と研究の目的 明治大学黒曜石研究センター（COLS）は2001年4月に長野県小県郡長和町に設置された本学の研究・知財戦略機構附属研究施設であり，地元の長和町と本学との研究推進協定にもとづく，日本で唯一の先史時代黒曜石研究を専門とする研究施設である。

COLSでは，中部高地黒曜石原産地と先史時代遺跡の調査，最終氷期を含む古環境の調査そして黒曜石と遺物の原産地分析を核とし，学内外の研究組織とも連携して学際的，国際的に研究を推進している。具体的には，石器時代におけるヒトと石器原料であった黒曜石資源のかかわり方が，気候変動などの影響を踏まえて，どのように歴史的に変化したのかを解明する研究を展開してきた。

プロジェクトと成果 近年では2011年度～2015年度にかけて私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ヒト－資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」を実施し，標高1400mの中部高地原産地にある広原（ひろばら）湿原を対象としたボーリングによる古環境調査と周辺遺跡の発掘調査を行った。

考古・古環境調査の結果，最終氷期から現在までの過去3万年間にわたる広原湿原周辺の植生変遷を復元することができた。また，広原第I遺跡と第II遺跡を発掘したところ，中部高地原産地での出土は初めてとなる局部磨製石斧を伴う3万年以前の後期旧石器時代前半期の石器群と尖頭器を伴う2万年前後の後期旧石器時代後半期の石器群，ならびに縄文時代早期の遺跡を発見している。



中部高地黒曜石原産地で明らかになった広原湿原周辺（標高1400m）における最終氷期の景観変遷

On-going research 2：縄文資源利用と地域文化の学際的研究 明治大学資源利用史研究クラスター

視点 縄文時代の特色の1つに、資源利用の地域的多様性があげられる。こうした現象は、さまざまな生態系への適応技術として理解することもできるが、多様な自然物の有用化（資源化）という人為的な行為の結果であって、必ずしも自然環境のみに制限されているわけではない。

目的 資源利用史研究クラスターでは、縄文時代を特徴づける貝塚形成や植物利用、漆工芸、製塩、古人骨の食性などをテーマとした分析を行い、多様な実態をもつとされる縄文文化を資源利用史という観点から解明する学際的な研究を計画している。

特に多様な資源利用技術が認められる地域が長期的な継続性をもつ社会であることに注目し、資源利用史から長期継続型地域社会の成立過程を解明するための遺跡や遺物の研究を進めている。

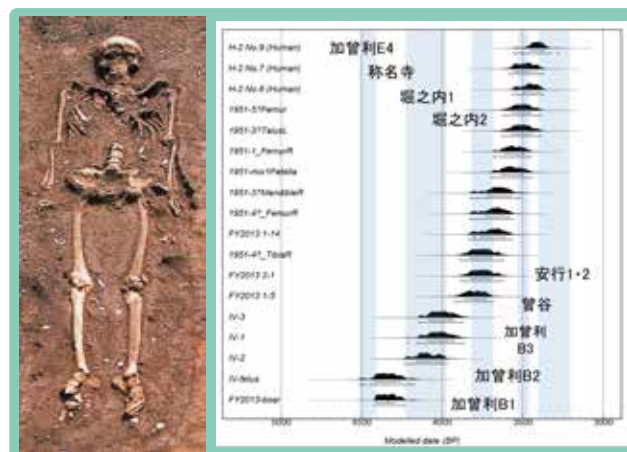
成果 縄文時代後・晩期に形成される集落は土器型式の連続性から推定すると1000年以上の継続期間を示すと考えられる。ただし、実際の連続性については推測にとどまっていた。東京都北区西ヶ原貝塚では直接人骨の年代を測定し、1000年にわたって人骨が埋葬されていた事実を明らかにすることができた。長期継続型の地域社会がどのように形成され、またどのような資源利用技術が存在したのか、先史考古学だけにとどまらない多視点的な研究が進められている。



東京都北区西ヶ原貝塚の立地



耳飾と土偶
長期的な継続社会を支えた土偶と装飾品



西ヶ原貝塚出土の人骨の年代 (米田穰氏提供)

On-going research 3：漆分析と漆利用の起源

明治大学天然資源研究所

設置と研究の目的 明治大学天然資源研究所は 2015 年 10 月に明治大学生田地区に設定された特定課題に関する研究ユニットである。

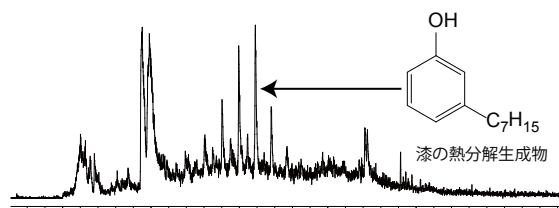
天然資源研究所は明治大学内外の漆や木材などに関わる研究を行うメンバーによって構成され、主として文化財に用いられた材料の分析に関する基礎研究と実際の品々（出土遺物や伝世品等）への応用を行っている。これらの研究を通じて、それぞれの時代の作品に用いられた材料および手法を解き明かし、当時の流通や技術の変遷を明らかにすることを目的として研究している。

研究開始より今年度まで、本研究所のメンバーである考古学専攻の阿部芳郎教授と共に関東地方の縄文時代における漆器作成技術の変遷を明らかにすることを目的に研究を行ってきた。

プロジェクトと成果 縄文時代の遺跡からは美しい漆器が数多く発見されることがある。これまでに主として研究した遺跡としては、南鴻沼遺跡、大木戸遺跡、デーノタメ遺跡（いずれも埼玉県）などがある。これらの漆器に使われた技術を様々な科学分析手法を用いて調べることで、当時の技術を明らかにすることが出来る。ここでは、埼玉県さいたま市大木戸遺跡から発見された漆器の数々に使われた“匠の技”を科学の目から明らかにしていく。今後は、より広域の関東地方の遺跡における漆器製作技法の解明を通じて、当時の材料の流通経路や技法の伝播の広がりについて解明を進めていく。

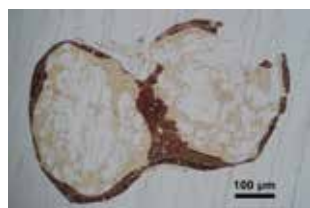
分析試料とその分析結果

漆塗りの糸（漆糸） (大木戸遺跡出土遺物)

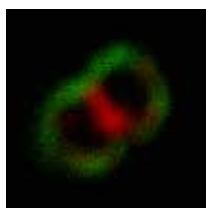


Py-GC/MS 分析結果 (m/z 108 イオン抽出)

この漆糸は、2本の繊維を弁柄漆（赤い酸化鉄を混ぜた漆）で固定した後に、朱漆（赤い硫化水銀を混ぜた漆）で彩っている。朱漆の方が明るい赤だが希少な物だったため最表面のみ朱漆を使ったと思われる。

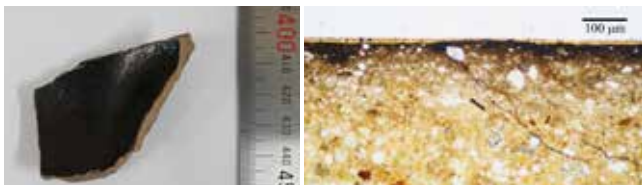


クロスセクション像



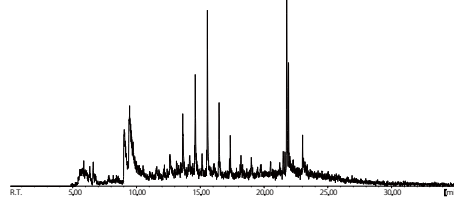
赤色:鉄 緑:水銀
ED-XRF 像

(大木戸遺跡出土遺物)



黒色土器

クロスセクション像



Py-GC/MS 分析結果 (m/z 108 イオン抽出)

黒色の土器から漆が検出された非常に稀な例である。数 μm の漆を塗布することで土器を『漆黒』に仕上げることで、他の土器と差を付けたのではないかと考えられる。

縄文時代の漆器製作技術は非常に高度で、今回の黒色土器への漆の塗り方などまだまだ未解明の部分も多い。これからも実証を含めた研究が必要である。

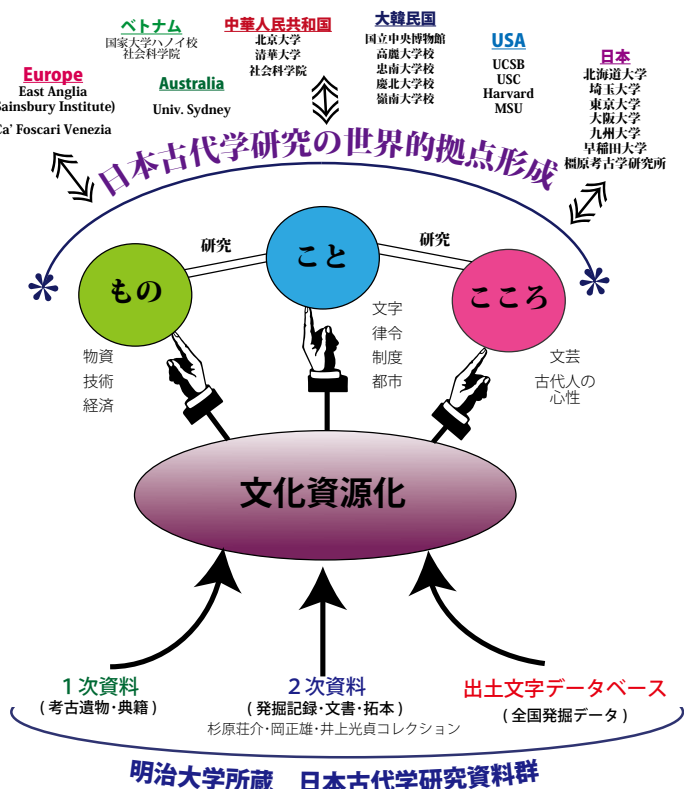
On-going research 4：学際的日本古代学研究の確立 明治大学日本古代学研究所

研究の細分化への対応 明治大学では、1932年に文科専門部が発足し、1949年には新制大学として再出発して、文学・史学各分野の教育・研究を展開してきた。特に考古学分野は、全国の旧石器～古墳時代遺跡の調査・研究を積み重ねてきた。

20世紀末になると各学問分野で研究の細分化の弊害が指摘され、分野横断的な研究や教育の必要性が説かれ、対応が求められた。そこで私たちは、考古学・日本史学・日本文学3分野を研究する古代学関係者が協同する場を組織することとした。

プロジェクト型の研究と教育 学際的な古代学研究と教育は2004年度から始動した。研究面では、文部科学省学術フロンティア事業「日本古代文化における文字図像・伝承と宗教の総合的研究」として明治大学古代学研究所を組織して学際的共同研究を開始した。同時に、教育面では大学院博士後期課程科目として「文化継承学」を新設して、考古学・日本古代史・中国古代史・日本古代文学・中国文学の教員と院生による合同授業も開始した。2008年度には文部科学省の組織的な大学院教育改革推進プログラムとして「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」が採択され、大学院教育の刷新を行った。

現在のプロジェクト 現在は明治大学国際日本古代学研究クラスター<日本古代学研究所>として活動し、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本古代学研究の世界的拠点形成」として組織的研究を行っている。明治大学がもつ杉原荘介・岡正雄・井上光貞という3名の考古学・民族学・古代史研究者関係資料をデジタル化して公開することをはじめ、アジア・欧米の研究者・組織との共同研究を展開している。杉原資料には、日本考古学協会の創設や海外研究者との交流を知る資料が含まれている。岡正雄の学位論文“Kulturschichten in Alt-Japan”（古日本の文化層：ウィーン大学・1933年）とその学説は、戦後の日本民族形成論に大きな影響を与えた。



杉原荘介 (1913～1983)

研究成果の蓄積と公開

近年、考古学研究の外部資金の獲得にあたっては、特に学際的な研究展開の強調が求められている。現在の考古学研究室の紀要としては2005年に再刊された「考古学集刊」（2017年に第13号）があるが、ここでは学際的研究の観点から明大考古学の多様な研究成果を近年どのような媒体で公開しているかを紹介する。

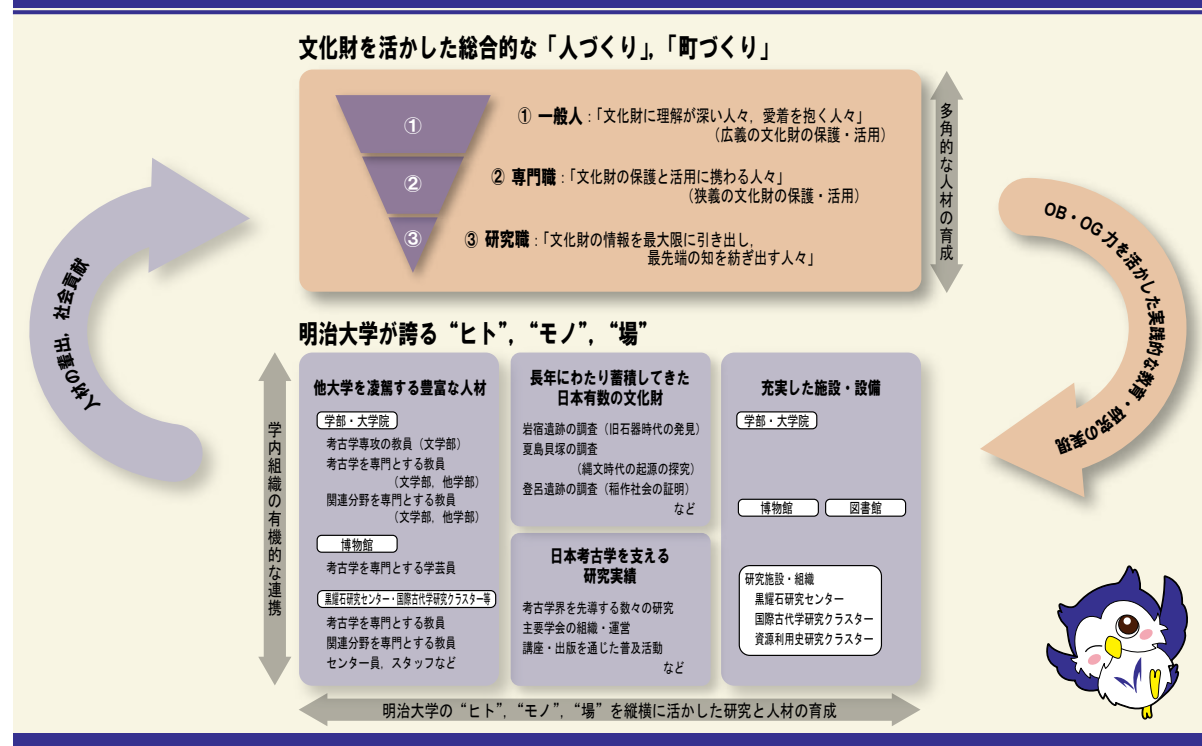
明治大学黒耀石研究センターは、2000年度～2004年度に実施された文部科学省学術フロンティア推進事業「石器時代における黒耀石採掘鉱山の研究」の研究拠点として長野県長和町に設置された。理化学分析を取り込んだ学際研究の成果は『黒耀石文化研究』創刊号（2002）～第5号（2007）として刊行されている。

縄文時代研究を学際的・多視点的な研究手法で推進する明治大学資源利用史研究クラスターは、特定課題研究ユニット日本先史文化研究所を前身として2017年に設立されたが、2009年から継続して『日本先史文化研究の新視点』第1巻～第V巻として成果を刊行している。さらに『季刊考古学』別冊第21冊や岩波ジュニア新書など多様なニーズに対して商業出版を行っている。

弥生・古墳時代の研究では、学内に明治大学古代学研究所を設置して、文献史・考古学・古代文学を統合する文部科学省学術フロンティア推進事業「日本古代文化における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究」を2004年度から開始した。『古代学研究所紀要』は2005年に第1号が刊行され、金印研究や古墳測量調査など、弥生・古墳時代の研究成果も数多く掲載されている。その後、紀要の刊行は現在までに第24号を数えるまでになっている。

前述の黒耀石研究センターは、2011年度～2015年度に文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ヒト－資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」を実施し、『資源環境と人類』を2018年までに第8号、資料・報告集も4冊刊行しており、理化学分析、古環境研究と連携した旧石器・縄文研究の成果が公開されている。

明治大学だからできる考古学とは何か？：大学と社会を巡る『循環』の確立



明大考古学と社会： 卒業生たちによる地域振興や発掘にもとづく文化財保護

黒曜石のふるさと：長野県小県郡長和町鷹山遺跡群（写真提供：長和町教育委員会）

長和町は、星糞峠黒曜石原産地にある鷹山先史時代遺跡群に長和町立黒曜石体験ミュージアムを設置している。充実した石器作りなどの体験学習プログラムを独自に提供しており、全国の小・中学生に考古学と黒曜石の魅力を発信している。「黒曜石のふるさと祭り」を毎年開催し、黒曜石原産地と遺跡の保存と利活用のアピールを行っている。また、星糞峠にある縄文時代の黒曜石採掘鉱山は国史跡に指定されており、イギリスのセトフォードにあるフリント採掘遺跡のグライムス・グレイヴスと姉妹遺跡協定を結んでいる。



長和町立黒曜石体験ミュージアム



ミュージアムで開催の体験学習



石斧の製作と木の伐採体験



黒曜石採掘遺跡の発掘現場で黒曜石学習

「動く博物館」：茨城県稲敷郡美浦村陸平貝塚（写真提供：美浦村教育委員会）

美浦村にある陸平（おかだいら）貝塚では、1987年から1998年にかけて遺跡保存のための確認調査や周辺遺跡の発掘調査を明治大学考古学研究室の協力のもとに実施した。周囲の自然景観を含めて貝塚が保存され、その傍に美浦村文化財センター（陸平研究所）を開設した。現在、陸平貝塚は、故戸沢充則が提唱した「動く



陸平貝塚の貝層



1987年の陸平貝塚確認調査

博物館構想」の理念のもと、常に新しい何かを生み出し発信する拠点として、体験事業やイベントをはじめ発掘や竪穴住居復元などの住民主体の多様な事業を展開し、地域文化創造のシンボルとなっている。



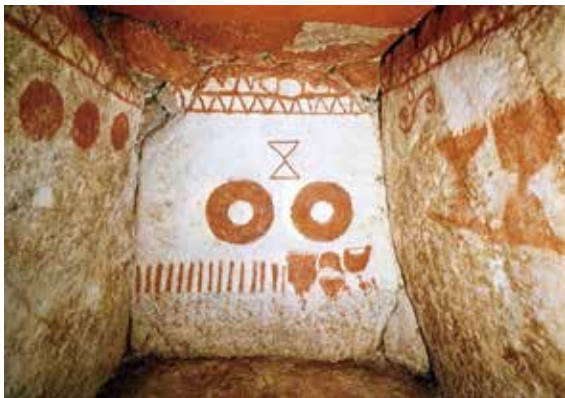
竪穴住居復元プロジェクト



縄文食体験

装飾古墳の保存公開：茨城県ひたちなか市虎塚古墳（写真提供：ひたちなか市教育委員会）

虎塚古墳では、明治大学考古学研究室が協力した1973年の発掘調査により彩色壁画が発見され、国指定史跡として保存された。1980年以降は、壁画の保存公開施設の整備により春・秋に壁画の一般公開が行われている。未開口石室内の初の環境測定が東京国立文化財研究所（現東京文化財研究所）によって行われ、このデータを生かし、現在も明治大学考古学研究室と東京文化財研究所が市と協力して装飾壁画古墳の保存と公開を行っている。虎塚古墳は、わが国の装飾古墳の保存公開に関するモデルケースである。



虎塚古墳



馬渡埴輪窯跡（ひたちなか市）

1969年に国指定史跡となり、保存整備後に公開。



十五郎穴横穴墓群（ひたちなか市）



十五郎穴横穴墓群出土遺物

1976年から1980年の発掘調査以降、その保存に向けて横穴群の確認調査が進められている。

謝 辞

展覧会および本書の制作にあたっては、以下の機関・個人より多大なご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表します。

協力機関：茨城県教育委員会・佐倉市教育委員会・長野市教育委員会・長和町立黒耀石体験ミュージアム・長和町教育委員会・ひたちなか市教育委員会・ひたちなか市埋蔵文化財センター・美浦村教育委員会・美浦村文化財センター（陸平研究所）・四街道市教育委員会（五十音順）

協力者：稲田健一・大木美南・大竹幸恵・海沼真澄・川嶋陶子・蒲生侑佳・木名瀬凌太・斎藤直樹・塩原 健・須藤隆司・竹林香菜・中村哲也・橋詰 潤・馬場信子・平間未悠・別所鮎実・本多貴之・眞島英壽・森ゆき乃・山地雄大・米田 穰（敬称略，五十音順）

明大考古学の過去・現在・未来—モノ学のその先へ・・・—

2018年5月25日発行

編集 明治大学文学部考古学専攻 明治大学博物館

発行 日本考古学協会第84回総会実行委員会

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

明治大学博物館内

TEL 03-3296-4448（代表）